

西郷と大久保

児玉 寛嗣

海音寺潮五郎の小説「西郷と大久保」を読み返した。海音寺は鹿児島生まれで、同郷のふたりに興味を持っていたようである。ふたりは木戸孝允と並んで「維新の三傑」と称された明治維新の立役者である。ともに下級武士の息子として同じ町内に生まれ、西郷が二才年上と年も近く仲も良かった。ふたりの性格はまったく違っていたが違いをお互いによく理解していた。

西郷は京都から幕府に追われて逃げてきた僧侶（月照）と入水自殺を企てるなど情に流され命を粗末にするところがあった。厭世的で時代の歩調に合わせようとしないところもあった。それらが西郷を人間味豊かなものにして圧倒的な人気を得た所以なのだろう。

一方の大久保であるが、冷静に周囲を見回してあらゆる行動を計画的に進めていく落ち度のないやり方をとった。しかし、冷徹さゆえに人気がなかったのかもしれない。

西郷は維新前夜に勝海舟と談判、江戸城の無血開城を成功させるなどの功績があった。だが、大久保など意見が合わず征韓論で敗れて下野した。大久保の征韓論反対の理由は「外国を攻めるより、まず国内のこと」というだけでなく、西郷を一人で韓国に行かせて無駄死にさせたくないという友情もあったのだろう。下野するという西郷を引き留めようとする人たちに「東京には大久保がいる。わしがおらんでも少しも心配ない」と答えたという。鹿児島に帰って学校を作り若者の教育にあたるが、大久保の指揮する西南戦争で戦死した。

大久保は初代内務卿として実権を握ると、学制や地租改正、徴兵令などを着々と実施、不平士族の乱を鎮圧して「富国強兵」を唱え、殖産興業政策を推進した。西南戦争の翌年、馬車で移動中の大久保は西郷を崇拜する青年たちによって暗殺された。その時、大久保は馬車の中で西郷の生前の手紙を読んでいとされている。

西郷のほうが人気があるが、果たしてどちらが国家建設に貢献したかを考えると、大久保の評価はもっと高くてもよいのではないか。